

37

小酒井不木の『医学上より見たる百年後の人間』 (1928年執筆)と現在

渡部 幹夫

順天堂大学

小酒井不木(光次)(1890~1929)は大正末期昭和初期の日本探偵小説界の草分けであるが、東北帝国大学教授に任ぜられた生理学・血清学者でもあった。1914年東京帝国大学医学部卒業翌年肺結核発症、1917年東北帝国大学助教授、米国留学、1918年ニューヨークでインフルエンザ罹患回復後、1919年渡英、衛生学研究生活と療養生活の中で、英国医学史と探偵小説を愛読した。同年パリに移動後咯血重篤となるが、療養して帰国1920年11月東北帝国大学教授となる。1921年郷里名古屋にてインフルエンザ肺炎から危篤となるも回復、教授を辞して『学者気質』にて文筆業・作家となる。咯血や血痰をみながらも流行作家、変格作家として多数の探偵小説、SF小説、随筆を執筆した。

小酒井は1929年に急性肺炎で急逝した。医学論文よりも、多くの探偵小説と『人工心臓』や『恋愛曲線』などSF小説を残した。大正末期から昭和の初期は日本の戦間期であり、ラジオ放送が開始されるなど社会的にはモダニズムの時代とされるが、世界恐慌に向かう激動期である。

小酒井不木全集(全17巻)が急逝後編まれ、その第7巻の随筆【趣味の医学】に『医学上より見たる百年後の人間』がある。「西暦2028年に、物好きな人が古本屋の隅から本誌を見つけ出して、たまたまこの文を読んだならば、きっと腹を抱えて笑うに違いない」とある。小酒井の筆による百年後の人間の記述を要約して一部を示す。

- (一) すべての物を透視しうる、レントゲン線に似た一種の放射線が発見され、人体の内景が発見され、それによって人体の透視により的確な診断を下しうる日が来るに違いないと思うのだが、病氣にかかった場合にはむしろ診断してもらわぬようになりはしないかと思う。
- (二) 百年後の人間の身体は大きな変化を受けないであろう。百年後、最も目立つのは眼鏡をかけた人と義歯を入れた人が非常に多いことである。医学が発達して不完全な器官を人工的に匡正する結果ますますその不完全を多くならしめる。
- (三) 医学の発展の結果、不完全な分子を人体に保存し、百年後の人体はその質を低下するであろう。レントゲン線の応用、手術、移植により弱い体質を強くしたり偏った性質を真っすぐにしたりすることが盛んにおこなわれる。催眠医学が隆盛を極め、精神に関する医学がその中心となるであろう。人智の発達ははかり知れないが、案外今の世が人智発達の頂点にあるかもしれない。
- (四) これまで発見されなかった、痘瘡、麻疹、猩紅熱等の病原体も発見されているだろうし、いわゆる化学療法も相当に進歩しているだろう。癌や結核の化学療法は完成しているとは思われぬ。神経衰弱という名は百年前にはなかったが百年後には現今ない病気が発生するかもしれない。電波の応用は盛んなことであろうから、その電波が人体に作用して電波病というような名がつけられぬとは限らない。新しい伝染病が発生することは一寸考えにくい、自然科学的知識の応用が新しい病気を起こすことはありうる。空中旅行が自由に行われるようになると、一種の病気が起こりうることも想像する。不老不死の研究をする人間は尽きないであろうが、長寿者は今ほど沢山はいないであろう。人間の生殖能力の衰退があらわれるかも知れない。そうして人口問題は案外容易にかたがつくかもしれない。

いやなんだか自分ながら、言っていることに条理が立たなくなってきた。小説でなくても、やはり将来を予言するのは出鱈目に終わるものであるらしい。

と結んでいる。

小酒井の予言の一部はあたっているし、大きく間違っていると考えられることもある。未来学という学問領域が存在する現在であるが、その視界は30年後や50年後にとどまっているように思われる。われわれは100年後の未来をどのように描くことができるのであろうか。